

令和3年TOKAI原子力サイエンス フォーラム

原子力災害の記憶・記録と 地域のことを いかに考えるか？

2022/02/25

東京大学大学院情報学環 准教授
東日本大震災・原子力災害伝承館 上級研究員
開沼博

1

「災害」と聞いて思い浮かぶもの・・・

- ・ 関東大震災、阪神淡路大震災、3.11
「大災害」以外にも断続的に発生
定期的に繰り返される振り返り報道
- ・ 避難訓練
机の下にもぐる・滑り台・消火器・防災バッグ・・・
- ・ 災害＝防災？
減災 ハザードマップ 避難経路 リスク管理・危機管理
復興 事前復興 支援 ボランティア

=>私たちとの接点＝歴史、メディア、学校



https://www.jiji.com/jc/d47p=heq117&d=d4_o



<https://www.jica.go.jp/oda/project/1400609/index.html>



https://www.mlit.go.jp/report/press/mizukakudo06_hh_000089.html

4

原子力災害の記憶・記録と地域のことを いかに考えるか？

- ・ なぜ記憶・記録の継承が必要か？
 - ・ 未来に活かす知見・教訓を得て、具体化するため
 - ・ 意識しないと消える、改変される
- ・ いかに記憶・記録を継承するのか？
 - ・ 複雑な現実には様々な光をあてる
 - ・ 語りの可能性とその危険性と
- ・ 記憶・記録と地域のコミュニティ形成
 - ・ 過去を直視すべき
 - ・ 災害が生み出してきたものにも着目すべき

2

「災害」とは

- ・ いくつかのステレオタイプなイメージと結びついている
- ・ 災害についての情報は多いようにも感じるが、逆に飽きてもいる
- ・ 災害と私たちの日常との接点は意外と限られている
- ・ 「備え」が大事だとよく言われるが、それが限られているし十分かという検証もあまりされていない
「ハザードマップ見ておこう」「防災バッグを用意しておこう」
- ・ いざ発生すると大変な被害が起こる
- ・ 「想定外」のことが起こり続ける

5

災害と記憶・記録：

「災害」 と聞いて思い浮かぶもの・・・

3

「災害」を考える続けるのは意外と大変

- ・ もっと準備ができるのでは？「想定外」を想定するには？
=>災害の見えていない、考えてきていない部分の把握
- 1) 時間軸を拡げる
「災害とその直後」に限定しない！
- 2) 被災地・被災者の外側にあるものを見てみる
支援者？よそ者？
- 3) 災害の外側にあるものも見てみる
災害とは一見関係ないもの

6

災害の不可視を視る：

「鳥の目」から「虫の目」へ
～地域との邂逅～

7

数字を視る（１）

3. 11を経験した福島県では、地震・津波による死者＝直接死は1 6 0 5人に及ぶ。
それに対して、震災関連死＝避難の過程・継続の中での死者は
2 3 1 4人（2 0 2 0／9 現在）

⇒地震・津波から生き延びても、
急で、長期化した避難（状態）が
大量の命を奪ってきた

当然、避難は必要。
同時に、避難とその長期化は人命を奪う。

10

不可視なもの



http://www.asahi.com/gallery/hanshin20/kobe_nagata/kobe_nagata11.html



8

数字を視る（２） リスク回避がリスクに

- 避難の途中に人命が失われる
病院、福祉施設に入所している
バスの長時間移動
避難先の環境
- 避難の長期化で人命が失われる
日常生活のサイクルが壊れる
運動不足、悪い食習慣、引きこもり傾向



- 命が助かって、同レベルのストレスが心身にかかる
「お年寄り、持病がある人」以外にも健康被害は出る
生活習慣病傾向（子供の肥満傾向・体力低下も含む）
うつ傾向、アルコール等への依存症、DV・虐待
経済的・社会的行き詰まり

11

過去といまを視る

1930年 北伊豆地震



<https://www.fnn.jp/articles/-/2742>

2019年 大型台風



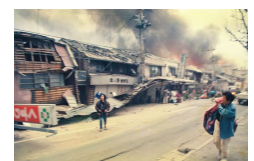
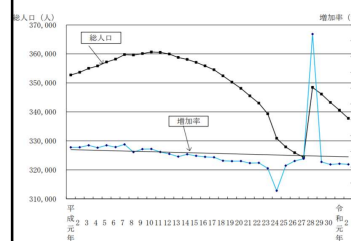
<https://www.japanplatform.org/programs/reiwa-typhoon2019/>

・課題の解決を阻む壁
忘却、コスト、担い手、発生確立低い、
そもそも課題が課題と思われていない・・・
⇒「いまやっていることは課題の解決に向かっているのか？」と問
い続けることが重要

9

地域を視る

- 高齢者・持病がある人、女性・子ども・・・
社会の「弱い部分」が可視化される
- 地域間格差が露呈して、弱い部分は「消滅」に近づく
過疎・高齢化が進んでいる地域、医療・福祉システム
が崩れている地域では、それがさらに加速する



阪神淡路大震災時の神戸市長田区
http://www.asahi.com/gallery/hanshin20/kobe_nagata/kobe_nagata11.html

12

原子力災害と地域と記憶・記録：
歴史的な地層を掘り起こす

13



16



14



17



15



18

11年前、
「原発依存経済」「安全神話」と評される風景が
あった
一方、
地域が科学技術と共生しながら
首都圏、日本全体を支え、
世界に先駆けたことをしてきた
という思いが地域に存在した

そこには「誇り」「文化」があり
未来があった

10年前、未来が見えなくなった
あれから10年

いま、未来が見えるのか？

19

「歴史的に見る」こと その言葉は「真実」か？



- いくつかの参考文献
 - 伊藤明彦『未来からの遺言
——ある被爆者体験の伝記』岩波書店
 - 田中悟『会津という神話—“二つの戦後”をめぐる
“死者の政治学”』ミネルヴァ書房
 - 宮地尚子『環状島=トラウマの地政学』みすず書房

22

あの時の「11年後＝現在」のイメージ

- ・「すぐ戻ると思ってた財布も持たず、免許と車のカギだけ持って出てきてしまった」(富岡町住民)
 - ・「自分がどこから来て、どこに行くのかもよくわからない宙ぶらりんな状態」(大熊町住民)
- =>不可視な未来

- ・「もう二度と戻れないんだ。農業・漁業なんかできなさんと国が言ってやったほうが良い」(地元テレビ局員)
 - ・「『放射線管理区域の基準』を超えているんだから除染をして帰還の準備をすること自体だめだ」(東京の文系学者)
 - ・「二度と人類が住めなくなったエリアでアートをしたい」(東京のアーティスト)
 - ・「国道6号線の再開通は許せない。常磐道・常磐線再開通をしたら大量被曝をするから絶対反対」(活動家)
- =>無責任な絶望；無知と他人事
「過剰反応と無視」(C.サンスティーン)

- ・(事故の性質から)幸いにも&(多くの人・組織の)尽力
 - ・廃炉を一步步ずつ安定的に進めてきたこと
- があって、あの時の「10年後＝現在」は覆されたことは明白

20

<https://www.iwanami.co.jp/book/b256495.html>

編集部より

(略)

さて本書『未来からの遺言』は、千人以上もの被爆者から話を聞いてきた伊藤さんにとって最も印象に残る一人との出会いが記されています。1971年11月の東京、伊藤さんは吉野二さん(仮名)という被爆者に出会いました。30代前半で長崎の放送局を退職した伊藤さんが、被爆者の声を聞きとる仕事に没頭していたある日のことでした。

吉野二さんは小学生のように小柄で、重度の近視がありました。長崎の爆心地近くで被爆したので、七人の兄弟で生き残ったのは自分と姉一人だけ、両親は即死したということでした。数年後に母も亡くなり、以後数えきれないほどの喪失と闘いながら、生活保護を受けつつ暮らしてきたというのです。このような被爆者体験こそぜひ記録したいと思って、伊藤さんは吉野さんに聞き取りを依頼すると、吉野さんは快諾しました。

こうして三日間わたって、吉野二さんへの聞き取りは続けられました。防空壕に入っていたために辛うじて助かった自分と、それでも助からなかった母、黒こげで見つかった父の遺体、被爆所での地獄のような光景、急性放射能症候群で重篤な症状だった自分を病院で見つてくれた姉、以後渡りたき生活を送った吉野さんを、姉・早苗は必死の思いで看護してくれました。時には姉弟で喧嘩をしながら、あれが食べたい、あれが飲みたいと無理な頼みごとをする弟を支えて、姉は必死の努力を尽くしてくれました。時には姉弟で喧嘩をしながら、あれが食べたい、あれが飲みたいと無理な頼みごとをする弟を支えて、姉は必死の努力を尽くしてくれました。時には姉弟で喧嘩をしながら、あれが食べたい、あれが飲みたいと無理な頼みごとをする弟を支えて、姉は必死の努力を尽くしてくれました。

それ以後の吉野さんの苦しみと奮闘した人生。自分とそこら遠く上がらうという努力。その結果は伊藤さんの心を強く揺さぶるものだったのです。数多くの被爆者の聞き取りをしてきた伊藤さんにとって、初めて出会ったのではないかと感じるほど深い印象深い証言でした。原爆によってすべてを奪われた吉野さんが原爆を否定する思想を育んでいた過程は、被爆者の心性を考える上で最も典型的で感動的な軌跡であるように思えたのです。これらの時局を持った吉野さんの証言を、ぜひ多くの人に聞いてもらいたいという伊藤さんは断ったのでした。しかし、伊藤さんにある疑問がわいてきました。

この先の話の展開を書くことはできません。ぜひ本書をご一読いただければと思います。吉野さんの証言に若干な疑問を抱いた伊藤さんは、どうしたのでしょうか。そして吉野さんの証言を通じて、被爆体験について伊藤さんはどのように考えを深めていったのでしょうか。

(略)

23

「歴史的に見る」こと 真実の先にあるもの

- ・「語り」について、いくつかの参考文献
 - 伊藤明彦『未来からの遺言
——ある被爆者体験の伝記』岩波書店
 - 1000人以上の被爆者インタビューをした著者が長崎での被爆者：吉野の話に最も印象深い体験談と感動する。どころか語り部の「プロ」の良し悪し
 - 田中悟『会津という神話—“二つの戦後”をめぐる“死者の政治学”』ミネルヴァ書房
 - 白虎隊非業の死、維新後の長州による仕打ちなど私たちが知る会津の悲劇はいつ生まれた？歴史や記録・記憶は後から書かれるand書き換えられる
 - 宮地尚子『環状島=トラウマの地政学』みすず書房
- 「言葉にならないほどの体験」が本当に言葉にならないのだから、言葉にすれば良い？じゃあ、言葉になっているものは被害・被災の中心にある言葉や記録・記憶は残らない

言葉と地域：

その危うさと可能性

21

24

「語れば良い」ってもんでもない：
良かれと思ってコミュニケーション促進イベントを地元開催したんだが・・・

- 原子力損害賠償・廃炉等支援機構が2017年、第1回福島第一
廃炉国際フォーラムをいわき市で実施
- 地元住民も何人が登壇させ、
きれいにまとめたつもりが・・・
- 「地元のことなんてわかんない」「何を言ってるのかわかんない」「二重の意味で「逆効果」」



何が悪かったのか？

https://ndf-forum.com/previous_forums/#forum1より

25

25

現場から浮かび上がってきた信頼回復 & コミュニケーションできない原因

- 何が分からないかが分からないに加えて、
- なぜ自分が考えるべきなのかも分からない
(廃炉のこと、福島の子どもの未来・・・)

=>必要なのは、参加住民自身の思いの
網羅的なビジュアルイズ、アーカイブ、モチベート

※既存の信頼回復 & コミュニケーションの手段
シンポジウム：3つともされない
説明パンフレット：ビジュアルイズされてても他は？
関連団体、原子力に関心が高い学生・生徒への講演...

28

「語り」を「起こす」こと

最大のズレ

- はじめから「ご説明」しようとする姿勢
- 住民は、まず聞いてほしい（だから来る、関心を持つ）
- そもそも「何がわからないかがわからない」
- 廃炉自体も「Unknown Unknowns」プロセス

じゃあ、

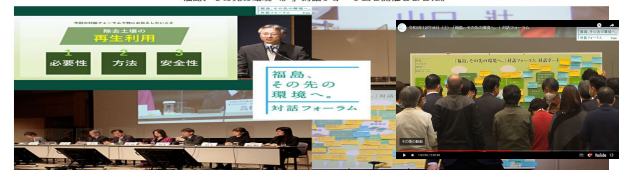
- まず徹底的に住民の声を聞く
- そのプロセス自体を徹底的に可視化する
- その上で説明をする（本音で）

26

26



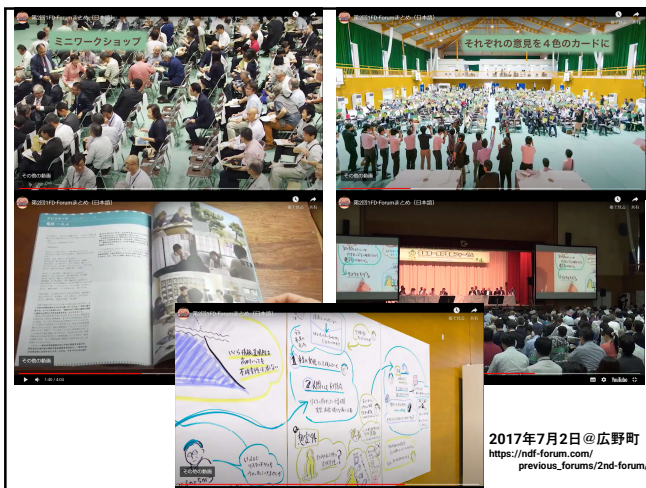
知っていただきたい福島の課題があります。除去土壌のこれから。
東日本大震災から10年。福島県の復興のために、今、知っていただきたいこと。
除去で発生した除去土壌等の再生利用、県外最終処分に向けてみなさんと一緒に考えていく
「福島、その先の環境へ。」対話フォーラムを開催しました。



知っていただきたい福島の課題があります。除去土壌のこれから。
東日本大震災から10年。福島県の復興のために、今、知っていただきたいこと。
除去で発生した除去土壌等の再生利用、県外最終処分に向けてみなさんと一緒に考えていく
「福島、その先の環境へ。」対話フォーラムを開催しました。

環境省 福島、その先の環境へ。対話フォーラム2021年12月18日@名古屋 http://shitehaki.env.go.jp/fukushimamira/sonosaki/dialogue/report_211218/

29



27



30

「歴史的に見る」こと 真実の先にあるもの

- ・「言葉」って結構危うい！
 - ・事実ではないことが結構混ざる
 - ・知らないことを聞かれて適当に答えてしまう
 - ・相手の求める答えを言うようになってしまう
 - ・ホントかどうか疑念が出たとしても確かめようがない
 - ・でも、権威性をもってしまう。
- ・「事実」と「解釈（選別・意味付け）」の微妙な関係。
 - ・だから、政治・行政・司法や学術では「文献主義」が基本。（でも、オーラル・ヒストリーなども注目される）
- ・しかし、それ故、価値がある
 - ・リアリティがある（象徴化・記号化／想像力
cf. ラカンの三界図式）
 - ・当事者性の力（⇔専門性の力）

31

災害は地域を変えるきっかけに（も）なる

- ・災害が地域にもたらす功罪
ショックドクトリン 災害ユートピア
PTG（トラウマ後の成長） 復興バネ
- ・災害は、それまでの地域の秩序を崩す
よそ者・若者・バカ者の活躍の余地を増やす
ボランティア・NPOなどを活性化させる
- ・災害は合意形成・意思決定の連続
住民参画・透明性確保が不可欠

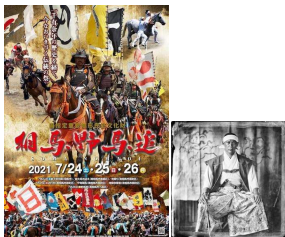


<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ045467930V00C19A9K12000>

34

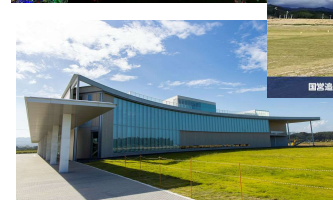
「歴史的に見る」こと 「敵・悲劇フレーム」を超えて

- ・マスコミは（あるいは専門家は）社会的危機の時、政治家であり宗教者のように動く必要が生まれる
その時、いかに条理と不条理を受け止められるか
(c f. 大川小学校の検証)



32

災害は社会を壊すものであるが、 新たに想像・創造するものでもある



国営追悼・祈念施設、道の駅「高田松原」及び東日本大震災津波伝承館

35

「歴史的に見る」こと 暗部を掘り起こす

- ・「番犬」ではなく「良き仲間（GoodNeighbor）」
としてのジャーナリズム
Poindexter, P. M., D. Heider and M. McCombs
2006 Watchdog or Good Neighbor? The Harvard International Journal of Press/Politics 11 (1) : 77.
- ・いつだって「中心」は「周縁」からやってくる
林香里『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』（新曜社）
- ・対話型専門知（H. コリンズ）をいかに想定し続けるか
第三の波 専門知を強かに活かす余地をつくる
科学や技術のプロたちの役に立つ「貢献型専門知」／一般の人にも役立つ形に加工された「対話型専門知」

33

原子力災害の記憶・記録と地域の関係は いかに考えるか？

- ・なぜ記憶・記録の継承が必要か？
 - ・未来に活かす知見・教訓を得て、具体化するため
 - ・意識しないと消える、改変される
- ・いかに記憶・記録を継承するのか？
 - ・複雑な現実には様々な光をあてる
 - ・語りの可能性とその危険性と
- ・記憶・記録と地域のコミュニティ形成
 - ・過去を直視すべき
 - ・災害が生み出してきたものにも着目すべき

36